



新入園児が集団生活に適應するまで

—ある幼児の事例—

藤村美津

△はじめに▽

四月の幼稚園、それは、いろいろの子どものかたまりである。集団生活などといっても意志の通じ合わない人間の集りにすぎない。

それを、みんなが、自分たちの幼稚園であることを自覚し、たのしく生活できるようにするには、どんな方法で、その集団性をつちかかっていったらいいだろうか？ 子どもひとりひとりの状態をよく知って、適切な指導をしていけたらと願いつつ、今年度の生活を記録していった。

四月八日 (土) (入園式後一週間の子ども姿)

はじめて、幼稚園にやってきた子どもたちは、どんな方法で、集団に参加したか。

1. 親から離れて、幼稚園の遊具を相手に遊べる(一人あそびの遊具が上。一人のりブランコ、トロッコをひっぱる、スベリ台)。
2. 親から離れて、入園前に結びつきがあったともだちといふ。あ

そぶ時もある。

3. 親から離れて、ブラブラ歩いている(自分の所有物…下駄箱、引き出し、帽子かけなど…を点検して歩いたり、名札をいじったり、遊具によりかかったり)。

4. 親から離れて、つつ立っている(ただ立っているだけ、なにもしない)。

5. 親と一しょに遊ぶ(なんとかして、園になれさせようと親が夢中)。

6. 親から離れられない(親も子どもから離れられない)。

この子どもの姿をどう受けとめ、指導したか。

この時期に教師が、意図した事は「子どもが、自分の足で、床の上に立てるように」ということである。だから指導はまず、⑤、⑥の子どもに重点的に行なった。子どもと、親を離す仕事をす。

四月十二日 (水)

T 「幼稚園は、お母様がいらっしやらない方がいいんです。子どもは、自分の足で、自分で立たなければ、教育は、はじめられないんです。だから、おひきとりください」

母親 「先生に、おまかせした方がよさそうです。どうぞ、おねがいします」

T は、母親を追ってとび出していきそうな、まさあきの手を、しっかりとにぎりしめる。

M 「手ヲハナシテヨ」 「カエリタイ、カエリタイ」 「カエリ

タイヨ」 先生、ハナシテ」

T 「離れたらどうする？」

M 「カエリタインダヨ」

T 「じゃ、ひとりでかえられるの？」

M 「カエレルヨ」

T 「かえられるの？ 道おぼえた？」

M 「道？ マダ オボエテナイケドネ」

T 「それじゃ、迷い子になっちゃうじゃない」

この辺から、泣きやみはじめたMは、Tの洋服に、くっつききり、それでも鼻をすすり、すすり、ともだちの遊ぶ姿を眺められるようになってきた。スベリ台も一回すべった。

四月十三日 (木)

次の日、Mの母親は「どうぞ、おねがいます」と気持ちよくMを



「手ヲハナシテヨ」
「カエリタイカエリタイ」
「カエリタイヨ、先生、
ハナシテヨ」



あんなに離して、ハナレテと泣いていたまさあき君も、一時間もすると私がお他の子の世話をしている間泣きやんでそばにくっついてる。

おいていってくれた。Mは、またも、Tの洋服にしがみついたが、今日はもう泣かない。ただ、どこに行くにもついて歩く。

今度はOの番だ。この子はMとちがって、母親を追ってとび出す勇気も、無鉄砲さもなさそうなので、あまり手をかけない。はじめ、泣いたり、わめいたり、じたんだふんだり、ひっくりかえったりしていたが、二十分もすると泣きやんで、つつ立っている。次の行動になかなか移れない。足をちよつと動かすのも、手をちよつと動かすのも、気にしている様子が、よくわかる。

——この日の午後、Oは五年生になる姉と一しょに、幼稚園に遊びにきた。家中がOのために力を合わせている。

姉「先生、チョットキテクグサイ、Oガ先生トオ話シタイツテ」

とFアの外で声をかける。Tが出ていくと、Oははずかしそうに逃げようとしたが、姉がそのともだちと二人でOをおさえ、

「先生、オ部屋テ少シ遊ンデイデスカ」という。少しの間部屋でピアノを弾いたり、本を読んだりしてあそんでいた。——

四月十四日 (金)

Oが、はじめて、絵をかく。

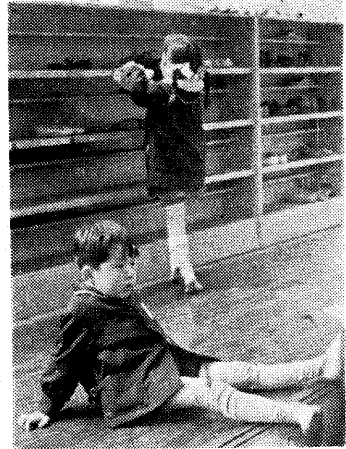
O「ホクモ絵カク」

T「じゃ、クレヨン持ってこなくちゃ」

O「先生ココニイテネ」

——といって、たいへん、ぐずぐずかきはじめる。

わめいたり、じたんだふんだりしているが、よくみると泣いていない。



いつもこうしてくっついてるんです。でも視線はともだちにいっています。



「やっぱり泣きますでしようね」とおかあさん



Mは、相変らず、洋服にくつついて、Tのいくところは、どこにでも、ついて歩く。Oが絵をかく間も、一しよにそばに座り、そこに集ってきた五、六人の子どもたちと、結構、たのしそうにふざけている。

——この時期は、まだ会話は無い。ただ「クチュクチュクチュ」と手をあこの下やわきの下に入れ、くすぐりっこをして、ふざけ合っている——

四月十五日（土）

O、母親から離れる時だけ、ちょっとぐずったがあとは、ひとりで、グルグル部屋の中を歩きまわったり、立ちどまって、ともだちの遊びを笑いながらみている。自分も遊びたい様子が、全身にみながっているが、決断がつかない。

M、はほとんど、ともだちの中に入れたようだ、といつても、Tが一しよでなければだめなのだ。常にTを気にして、洋服にくつついている。時々、きつくすそをひっぱるので、まだまだ、自立までは時間がかかりそうだ、母親から離れたように、Tからも早く離れた方がいい。すつきりと、Mがひとり立ちできるように、チャンスをつくろう。

四月十七日（月）

O、ひとりで、ブラブラ歩きまわっている。今日は、部屋から出て、底の方までかけていった。「帰りのうた」を途中から口ずさ

んでいた。

M、朝 幼稚園にやってくるなり「今日モ先生ニクツツイテイヨ」という。Tの早く離したいというあせりを感じとられたかと、ギクリとする。

この頃、級のみんなは、ジャンケンあそび、リトミックを足がかりとして、自立とともに、となりにいるともだちを意識しはじめた。級を二組に分け、平均台の上でのジャンケンである。ジャンケンの勝負だけが目的でない。不安定な台の上で、ともだちどうしが支え合う。もちろん、意識の外での支え合いであるが、自分の前にいる人、後にいる人と、つかまったり、つかまえられたり、で知り合えたらと。

四月十八日（火）

T「ねえ、みんな！ 先生の所に、いつも、いつも、くつついてる人、いるでしょ」

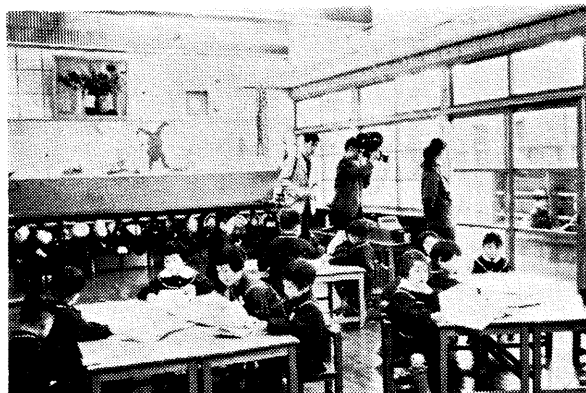
「イル、イル」

「コンドウ、マサアキ君」

「ねえ、この人、いつも、先生にくつついてはかりいて、いいかしら、みんな座っているのに、一人だけ、先生の所において、いいかしら」 「タメ」 「タメダケトサ、泣キ虫ナノ」 「ウチニ、カエリタインダロ」

「じゃ、みんなは、うちに帰りたくないの」

みながお弁当の用意をはじめても、まだ絵がかきおわりません。クレヨンも紙も全部かかえこんで「ほら、紙がぐちゃぐちゃになっちゃうわ」



みなが製作をはじめたときそっとぬけ出して、下駄箱へ——
はじめてともだち関係が生れた。

「カエリタイ」

「じゃ、どうして、まさあき君みたいに泣いたり、くっついたたりしないの？」

「ガマンシテンノ」

「がまんできるの？」 「デキル、デキル」 「まさあき君はどう？」 「デキルケドサ」

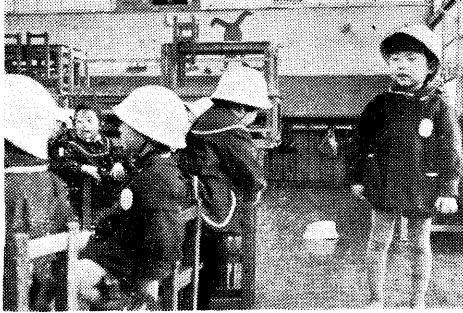
口では「デキルケドサ」といったが、離れる様子はない。

「今日ーダケ、許シテヤル」「アシタハ、ダメダゾ」「ソウ、今日ーダケ イイ」

T「まさあき君、今日だけ、先生の所にいいいて、みんながいてるけど、あしたはだめだつてよ、だいじょうぶ？」まさあき、ニヤニヤしている。帰り道、今日の話し合いの様子を母親に話し、もし明日Mが休みたいといつても、できるだけ、つれてきてほしいと伝えた。

四月十九日 (水)

今日は 朝から、元気な仲間につかまった。「先生、ジャングルオニ、しよう」という。そこで、Mが、例の如くすそにくっついていたが、思い切つてとび出した。Mも、先生、先生と、くっついてくる。ジャングルを昇ったり、降りたり、庭を駆けめぐり、スベリ台をすべり、またジャングルにもどる、など動きのげいあそびがはじまった。Tが、あまり早く走るので、Mの手も、Tのすそか

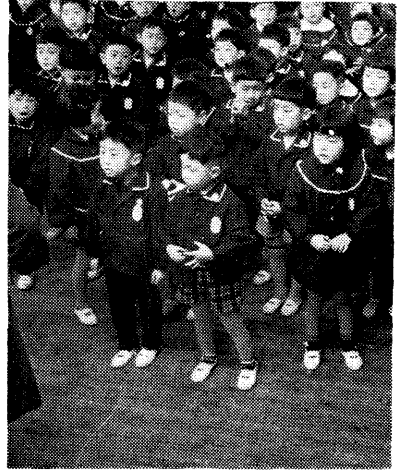


↓ 「ホライ アケテヤルヨノ」
「ハヤクタペロヨノ」



不安そうな指の動き、足の位置、
でもひとりて立ったのです。

← ぐるぐるともだちのまわり
りをまわりはじめた。



ら離れがち、そのうち、追いつかなくなったMは「先生、ボク、ツカレチャッタ、部屋ニイッテ、休ンデル」という。「しめた」これが、その時のTのいつわらざる気持である。

遊びのあい間に、部屋をのぞいてみると、いつも部屋で、粘土をしているYと、なにやら、話をしながら、椅子に座っている。Mもこれで、もう大丈夫だ。ともだちが、できたのだ。この日、洋服のすそが、ばかに軽い。

四月二十五日 (火)

級のみんなは、大分、集団行動ができるようになってきた。今日は朝から風が強いので、部屋で、ちぎり紙をしてあそぶ。ところが、みんな、しようという段になると、Oが、それに参加しない。ところが、今日は、ひとりではない。Hと二人で、下駄箱のところ、何か話をしている。呼ぼうか呼ぶまいかまよった。けれど、今のOの状態からすれば、集団に形式的に入ることより、そして、上手にしごとをするより、Hとのともだち関係を育てる事の方が、先決だと考え、その場は、そのままにした。二人は、しばらく、下駄箱で、自分の場所を教え合ったり、靴をとったりしていたが、やがて、庭に出て行き、ジャングルにのぼってあそびはじめた。

五月八日 (月)

この一週間、Oは、ほとんど、生活の流れから、はみ出ることなく、なくなった。そしてみんなのあそびの外側を、ぐるぐるまわっ

たり、粘土あそびに余念のないYと結びついたり、砂場にいったり、庭にでて木の皮をむしったり、いろいろの行動ができるようになった。そこで、今日からお弁当　また新しい関所きたわけだ。

「ミセテアゲル」「ボクノモ、見セテアゲヨウカ」「アテタラエライ、アテタラエライ」

「サンドウィッチ、チーズタモン」

「当テタラ、ミセテアゲル」

「梅干?」「タマゴ?」「タマゴテシター」

「ボク、梅干大好キナナダ」「コチラハ、サンドウィッチデゴザイ」「オムチュビオムチュビ」

「オ塩、カケテナインタロ、ヤルヨ、コノ塩」

「コノ塩、スッバインダゾ」

こんな楽しい雰囲気の中で、Oは顔をしかめ、足をガタガタさせて、お弁当を開こうともしない。

「タベナイノカ?　食ベンソ?」

「タベナイト、タヘチャウゾ」

こうなると、まわりのともだちがほっておかない。「ハヤク、アケナヨ」　そこで、Tも手伝って、お弁当を開く。ところが、なかなかフタを開けない。お弁当箱の中から、パンを少しずつとり出しては、こそこそと食べている。なに不自由ない恵まれた家庭に育っていて、こんなにも、とぎされた心をもつなんて、なんと、さびし

いことだろう。

五月十九日　(金)

O、はじめて、みんなの前で返事をした。

T「オカダマサハル君」「ハイ」

T「オカダ　マサハル君、立派な返事ができましたね」

そのうれしそうなお顔、やっぱり、うれしい時には、ニッコリ笑えるような子がいいな。

△おわりに▽

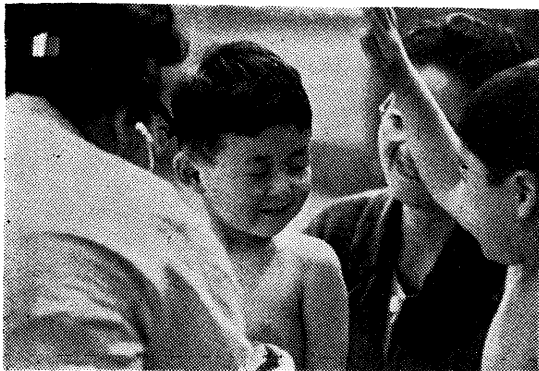
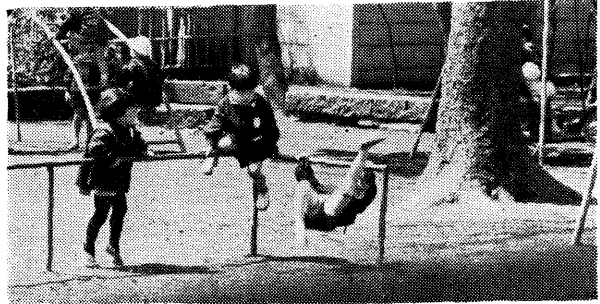
こんなふうにして、OとMは、幼稚園の集団生活に入っていくのです。親から離れられないという同じような子どもの中にも、その姿をおってみると、はっきりとちがうその子のもつ個性が、あるように思う。ただ、同じことは、親が、手をかけすぎていた、親のからの中に、とじこめられていたという事だけです。

このMやOのような子は、とかく、問題児扱いにされ、教師もその処理に悩むことが多いと思いますが、あくまでも、子どもたちの中に、その問題をなげかけ、生活を通して考えたり、行動したりしていく時、その子のもつよさが、見だされていくと思います。子どもの生活、それは、あそびそのものなのです。



(東京・平塚幼稚園)

「僕モ、トモダチがデキタ」
「足ヲ、コウ、カケテ、クル
ントマワルンダヨ」



「僕コノ頃イツモニココ顔
モウ泣キマセンヨー」

教育映画「友だち」をみて、たいへんよい映画だと思いました。子どもの気持ちカメラを通してよくとらえられていますし、幼稚園はこういうふうにして子どもを社会生活の中にひきいれてゆくのだということがよく示されています。幼稚園を題材にしてつくられたはじめての教育映画の試みがどんなものになったか少し不安を感じながらみにいったのですが、これはよくできていると思いました。幼稚園関係者に広くみていただきたい映画です。

こまかくいうと、一部の幼稚園関係の方から批判をうけるのじゃないかと察せられる点もあります。いすや机をくみ合わせからは叱られるでしょう。しかしそういうふうにしななければできない幼児の遊びを思いきってとり上げているからよい映画といえるのだと思います。ねんどべらをふり上げるところなども、安全教育云々と言ったらむづかしい議論になりかねません。けれども、それをやっており、やらせているから、よい指導になっているのだと思います。幼稚園では何をやるのかという啓蒙映画としての役割を果たしています。

ここに掲げられた写真は、この映画から転載されたものです。この映画の中に登場する一人の子どもの入園以来の変化を記録とともに追ったものです。

(津守 真)